

市町村勢要覧の編集のたいど

―調査結果を大衆にもどすこと―

1. 公表されないものは存在しない

アメリカはすでに十一世紀にライフ・エリクソンによって発見されました。しかし、その時はヨーロッパではそれがアメリカであることにさえ気づかなかった。それから四百年、十五世紀になってクリストファ・コロンブスによってアメリカは「一つの世界」としてヨーロッパ人にもたらされました。しかしそのアメリカは功績者コロンブスの名にちなんで「コロンビヤ」などとはよばれなかった。

コロンブスより少しおくれで出た平凡な探検家アメリカゴヴユスプツチが、大西洋を横断して大陸に渡り、その旅行記を発行したためその大陸の榮譽ある名は、ついに彼の名を冠して「アメリカ」とよばれる光栄をになったのであります。

こう考えてみますと、広くみんなに知らし、PRしな

い結果になる、とさえ結論づけられてきそうです。

地道な調査活動に、時にはウンザリすることもある調査活動に従う統計関係のみなさんと、表面的ではでやかなPR活動とを、ここでこじつけて結びつけようとは思いませんが、広く大衆との結びつきを考えてPRすることとは、民主主義の体制では必要とされる前提条件であり、また、いよいよ活発になされていかねばなりません。統計資料についても同じことがいえます。営々として積みあげて結果した諸統計が住民大衆の前に効果的に公表されないかぎりその資料は存在しなかったのと同じ結果になります。

そればかりではない。調査、そして統計も、住民大衆の生活の中からくみあげられたものであることはいうまでもありません。したがって、そうしてえられた調査統計結果も、また、できるだけ広く分かりやすく住民にかえしていかなければならないはずです。そうすることによってのみ、調査に住民はいよいよ協力し、統計はいわゆる「統計の嘘」から脱却して、客観的な資料性を獲得していくことができます。住民大衆とともにある統計調査活動こそ、日本を「民主化するテコ」の役割をいつのまにか果たしているのです。

こうした役割りをになうものの一つが、いわゆる「市町村勢要覧」であると私は考えています。要覧の作り方

については、適当な参考書が数冊あげられます。要領よくまとめてあつて、十分参考になります。しかし、ここではそういうものに書かれてあることは一切はぶいて、私の考えだけを短時間にのべましょう。

要覧の一つの秀れた見本としては、すぐに手に入るものが、岩波新書100円の「世界経済図説」「日本経済図説」です。私たち統計人と深いつながりのある有沢・脇村・美濃部さんのかかれたもので一つの範型となるでしょう。

2. では「要覧」は何のため、誰のために発行されるのか？

◎ねらい

発行の目的やねらいはどこでも「まえがき」とか首長の「あいさつ」などの形で明記されている。例えば、「この発展途上にある竹田市の姿を広く一般に知っていただくとともに、将来の指針といたすため市勢要覧を刊行いたしました―竹田市長」このねらいは正しい。じじつ、私じしん、竹田市の要覧は他にくらべてすぐれていると思います。

◎内か外か？

しかし、問題は、この目標がどれだけ実際化されているかということです。私の課員が全要覧をみて共同討議したとき、異口同音にまっさきに発問したこと

は、「要覧は一体外むけか内むけか？」ということでした。つまり、それは外来者などに持ち帰らせるものなのか、それとも住民に広く配るものであるのか、何れに重点がおかれているかということであります。

外むけ用として、要覧が「記念品」的なものであったり、また一種の「記念碑」的なものであったりすること大切なことです。そのために、観光PRをかねて上質の出版もしなければならぬ。しかし、内むけならば、それほど豪華にする必要もないが。数はふやさなければならぬかもしれない。こう考えると、内むけか外むけか？の問題はたしかに矛盾することになりそうです。しかし、内と外との矛盾は今では全くないと思う。「外に飾り、外によくする」ということは、かつては道徳でありました。しかし、要覧に関してだけいっても、内である住民大衆にとって値打ちあるものであつてこそ、外にも値打ちがあり喜ばれるものであるはず。今はもう、内と外とは一つになりだしており、住民にとって必要で新しい意味を感じさせる統計処理の仕方こそ、外部市町村関係者の大切な資料になるのです。

◎全町村こぞって発行を

いままで、外むけを考えすぎて、相当の費用をかけねばならなかったためか、市をのぞくと、ごくわずかの町村しか要覧を発行していません。規模の小さな町村といえどもその姿を住民に公表し、問題点を示すべきです。

しかも、町村合併によってその姿をかえ、地域も拡散しています。まず、町村内部の相互の認知のためにも、その発行が急がれねばなりません。

3. 編集にかかる準備はどうするか？

◎どんな層を対象とするか？

では、編集にあたって住民のどの層を頭に描いてとりかかるか。「要覧」を全住民の親しめるものを、とかがえるだけでは意味がない。たしかに、ラジオ・テレビ等で国民はますます文字を敬遠し始めている。まして、数字を中心としなければならぬ要覧には、非常な抵抗を感じています。だからといって、その抵抗を除くために、たんに平面的な統計数字のみをラレッツしたり、簡単な図表を加味したりするだけでは、要覧は実質的な意味を果たさなくなります。

要覧が郷土の現状を住民に分析的に認識せしめ、郷土振興の一つの基礎となるべきであるなら、それは当然、高い資料性をもたねばならないし、複雑な記録性を必要とし、住民に対する実地的な指導性をかちえていなければならぬ。そうになると、要覧は内容的にむづかしく、固い面が加わってくる。それでよいのです。私たちは「考える住民」を対象に、そして、編集する私たち自身が、まず一番に、考える住民として編集にあたりたいも

のです。

その社会的地位や性別年齢等のいかんを問わず、住民生活の中で何かしら中核になっている人物にねらいを定めていくことだと思う。こういう人びとの手に渡ってこそ、要覧は生かされ、この人たちをへて、要覧の知識も大衆に下されていくのです。

◎住民代表を加えた“編集委員会”を

とくに、編集委員会と名づけなくても、ふつう、各課各団体から提供される資料を数名で取捨選択しているようです。しかし、できるだけ広く民間人代表も入れた編集委員会を開くこと、このことは絶対の条件です。委員会が実際にタツチしているということによって、要覧のもつかもしれない内容の低さとか、部数が少ないとか等の一切の欠陥がづぐなわれる長所をもちます。それは、少なくとも住民の生活の中におり立とうという意志をもっているからです。

まず、委員会はどうな資料を要覧にもるかという企画について討論するはずですが、この時、民間人や学識経験者が入っておれば、その地域なりに住民の日常生活と深くつながりのある内容が必然的に要求されてくる。

住民大衆の日常的現実、日常問題はすべて私たちにとって注目すべきものがあるはずですが、委員会は、当然これらの日常的現実をみつめほりさげる調査を、少しずつではあっても着手し始める。そういった調査に、青年や

学校も参加させるならば、住民とともに歩む要覧ができあがらざるをえないでしょう。

私たちはどちらかというと、指定統計調査に多忙な日々を送っているうちに、住民じたいが要望し協力するじぶんたちの調査を忘れているむきもありはしないだろうか。

“この部落に病人は何人いるか” “この地区にバケツがいくつあるか” “お家で魚をかうことを誰がきめるか” 等といった調査は、しようによつては、子供でもできるし、その調査過程においても深い問題を発見するでしよう。病人調査をしたとすると、村にまだ沢山みられる「腰いた」は病氣の中に入るかどうか？子供だけでなく大人も婦人も考え込まねばならないでしよう。そうして婦人の過労の問題が村の問題として深くほり下げられていかざるをえません。

まして、それらの調査結果の分析、図表化等を学校教科におりこむようになるとすれば、もうこの郷土は明るい未来を思わずに十分です。こうした雰囲気がつみ重なるところ、おのずから青壮年も郷土の未来図を描いていくであろうし中学の少年たちも郷土の理想図を語って学校を巣立っていくことでしょう。

4. 具体的にどんな内容をおりこむか

要覧には、簡明にして一覽できねばならぬ要素と、重要な問題点はおとしはならないという二要素がそろっていないければなりません。しかし、それは必ずしも体系的もうらめであることを必要としない。ただそれぞれの資料が相互に関連のあるような深まりがのぞましく、年ごとに重点的な特色をだすようにするとなおよいと思います。

◎ 現行の要覧にあらわれた特異点

別表のように、各要覧には最低必要な項目がおのずから定まっていますが、それ以外の点でとくに注目をひいた問題点をいくつか列挙して他町村の参考に供してみましょう。

“標高”を大分市と野津原村があげているが、標高が本来に必要な町村が標高に関心を示していない。

各種の土木建築事業の詳しい一覽表を庄内町はあげている。“農機具の増減”（大分市）“金肥消費状況”（竹田市）は農業経営の変革といういみでも重要であるが、他の農村部は扱っていない。漁村を一部ひかえた中津市が漁業資料を無視せず詳しく扱っている。また、野津原村の“診療所に関する統計”や中津市の“年表”などが秀れており、各党派得票数を示したのは大分市だけでした。

以上いくつかあげた例からも、さらにどんなものが考えられねばならないかはおのずからみちびかれてくる

と思います。

面積や人口密度を掲げない所はありませんが、地域を単に広さとしてでなく資源として扱う配慮がほしい。農村地区であるなら、当然耕地面積に対する人口密度を示すことだと思えます。日本の人口密度はオランダについて2位ですが、耕地面積に対しては1位で2位をはるかに引き離しています。

また、各種の生産についても、ただその年だけの数字が並列されているが、年次別にみてそれぞれの傾向が分かるようにしなければならぬ。再び、農業についていえば、稀に土地の生産力を示すのがあっても、農業者1人当たりの生産性については全く考えられていない。例えば、土地の生産力については、日本は小麦で世界3位、米はエジプトに次ぐ2位だが、農業者1人あたりの生産高は低位で麦類にしてアメリカの約60分の1というありさまで、日本の農民が自分とほかに1人だけしか養えない状況を考えさせることも必要だと思えます。

二、三男問題に関する資料も当然考えられねばならない。しかし、二、三男人口でさえ全くふれられていない。また、山林地域でありながら山林形態についての民有、官有別とか山林地主の規模とかいった簡単なことさえうかがえなかった。

つぎに、所得面を中心にした住民生活についての統計的資料が極めて貧弱であることが、全要覧を通じての悲

しい特色です。住民所得を考える場合、1人あたりの住民所得の数字だけでなく、各階層に分配された所得にも注目すべきです。

租税負担の推移、市町村財政の中の租税収入の比率、できれば所得階層別の税額対比まで考えたいものです。家計費の構成を分析し、その中で飲食費のしめる割合（エンゲル係数）、被服費、光熱費、住居費、雑費（教育、医療、娯楽、修養等）を年次別に示し、人間らしく生きる生活を目指してお互いが考えるようにすべきでしょう。

以上はほんの一端で、内容的に深めていかねばならない多くのことが残されていますが、ここでは、眼を広く地域外にもむけ、同規模の他市町村との対比、県内での位置、またできるだけ世界的視野にたつことにも留意しなければならぬということだけをつけ加えます。

私はいくつか実行しにくいことを申し添えました。それにしても調査に従うものがその仕事に応ずるほどの報いをうけていないといわれてきました。じじつ外面的にみて、あまりにも地道なために報われることとうすいという実感を否定できません。

しかし、外部から報いられることとうすいこの仕事であるとしても私たちじしんで、じぶんに報いうる主体的条件を作ることはできると思えます。

民主的社会と一口にいわれますが、率直にいつて、社

会は大きな機構として私たちの上にのしかかり、私たちは小さな原始的な存在にすぎないという孤独感も深くなっている大衆化しゆく社会でもあります。そうしたなかで、私たちは眼を上の方にばかりにむけず、大衆の日常的事実にしっかりと注ぎ、それを調査し、その事実を公表していくとき、住民大衆はいよいよ客観的事実を中心に結びあつていくのです。そして、「調査なくして発言権なし」ということばを味わうことができるであります。

住民大衆が結びあうところのみに、社会の民主化はおしすすめられています。

時には青空に浮かぶ白雲見上げていただきたい。風のないとき、その雲はじつといつまでも動かないように思われます。しかし、こころみに4、5分ほど眼をはずして後、再びその姿を追うてみます。あの不動のものみえていた白雲のたたずまいは、全く姿をかえてしまっているのです。こうして、心ない雲も、区切りをつけて見つめるとき、非常に動いていることに気がつきます。私たちの住む地区も昔なりの古さがおいかぶさり、いつまでも民主化が進展していかないように悲観的になりやすいものです。しかし、こころみに3年あるいは4年前と今とを区切って比較するとき、余りにも変貌しているのに驚くことでしよう。

われわれの調査活動も、じつは、この大きな社会的変

貌の地下水的な役割をはたしていると確信できるかできないかは、まったく私たちじしんにかかっていることでもあります。

(1957年の調査広報課課長補佐時代に作成した統計資料より)